

## Virginia Woolf の *To the Lighthouse* におけるセザンヌの影響

英語学・英米文学分野

原田歩実

ヴァージニア・ウルフの小説における印象主義の思想的背景には、ペイターの印象主義的芸術論、イギリス経験論哲学、20世紀初頭のケンブリッジの哲学やロジャー・フライやクライヴ・ベルの後期印象主義的芸術論などが指摘されているが、本論文では、後期印象派の画家ポール・セザンヌからの直接的影響に言及し、『灯台へ』においてセザンヌの影響がどのように表現されているのかを明らかにする。

第1章では、セザンヌの絵画の特徴を多視点、幾何学図形、色彩の3つに分け、セザンヌの技法や絵画に対する考え方を、彼の代表的作品を例に挙げつつ説明する。また、セザンヌの絵を観たウルフの反応についても述べる。第2章以降では第1章で取り上げる3つの特徴に沿って、『灯台へ』におけるセザンヌの影響について述べる。

第2章『灯台へ』における多視点では、とりわけ複数の登場人物がひとつのものを見る時の、その対象物や対象人物に対する印象や捉え方の違いに着目する。『灯台へ』における多視点の描かれ方は3つに分けられる。1つ目は対象物（果物皿）に対するイメージの差によるもの、2つ目は対象人物（ラムジー氏）に対するイメージの変化によるもの、3つ目は対象物（灯台、海）に対する距離の差によるものであり、そのすべてに様々な形で統一感が描かれる。

第3章『灯台へ』における幾何学図形では、女流画家リリー・ブリスコウの描く絵に注目する。『灯台へ』における幾何学図形について、セザンヌの影響は、リリーの絵画や絵に対する考え方の中に描かれる。

第4章『灯台へ』における色彩では、2人の画家（リリー、ポーンズフォルト）やウルフがセザンヌの絵を観た時の感想——「堅固さ」——に注目する。『灯台へ』における色彩について、セザンヌの影響は、リリーの絵画や絵に対する考え方の中に描かれているものと、ポーンズフォルトの絵画に逆説的に描かれているものがある。